

深く、そして広く

JICE REPORTの創刊を、心からお慶び申し上げます。

国土技術研究センターが発足して、30年近くが経ちました。発足当時のセンターの役割として「日々の仕事に忙しい行政に替わって、一つのテーマをじっくりと考える組織が必要であり、それが国土技術研究センターである」という説明を受けたことを思い出しております。

戦後50年余、我が国は荒廃した国土から“奇跡”と呼ばれる程の発展を遂げました。諸外国に比べて社会資本整備の歴史が浅いこと、地震、洪水が多く、地盤が軟弱な国土条件等を考えますと、まさに“奇跡”としか言いようのない歩みです。資源がなく、国土も狭い我が国の発展を支えてきたのはひとえに“人”だと思えます。

21世紀に入り、国土交通省が発足いたしました。

- ①自立した個人の生き生きとした暮らしの実現
- ②競争力のある経済社会の維持・発展
- ③安全の確保
- ④美しく良好な環境の保全と創造
- ⑤多様性のある地域の形成

この5つの目標を掲げて国土管理(マネジメント)を担う省が誕生したことになります。この国土管理にとって最も大切な存在もやはり“人”であります。地方分権の流れの中、東京から指示を出し、地方がそれを実践するという仕組みは、大きな曲がり角に立っています。むしろ中央の指示によるのではなく、自ら自然を観察し、それを分析するとともに、地域の人々との交わりを深め、物事を深く考える“人”が求められています。こうした経験を積んだ人が政策の企画・立案に携わることで、足が地についた施策が立案され、実施されていくのです。

ただ、物事を深く考えること、即ち“思索”することは、なかなか大変なことであります。まず物事を深く識る必要があります。内閣法制局の参事官は、対象法案に関連する法令について十分識っておく必要があります。それと同様に私達技術者も、自然をそして地域の人々の考えやニーズを熟知していることが必要です。更に識るだけでなく考え続けることが大切です。卒業論文や修士論文



国土交通省 技監 青山俊樹

を書くまでの間、新しい考え方を打ち出そうとして“のたうちまわった”経験を持つ人も数多くおられると思います。仕事を“さばく”のではなく、それに“のたうちまわりながら”取り組んではじめて“思索”したことになるのでしょうか。ある人がその上司について「あの方の投げる球(指示)は重い」と評したことがあります。部下に対して重い球を投げるには、その前に一人きりの孤独な思索があるはずで、単にその場の思いつきでは、軽い球しか投げられないからです。思索ということを考えますと、技術者は専門分野を持ち、自然や地域社会にふれ合う機会が多だけ恵まれていると思いますが、専門分野に安住するのではなく、更に考えを深める努力をして、初めて視野が広がっていくのです。

専門分野に安住することを戒めるものとして、孔子の「君子は器ならず」という言葉があります(出典:中国名言辞典 金岡照光著)。著者の解説によりますと、君子は単なる技術者であってはならず、広く高い視野に立たねばならない、という主旨です。「彼は技術者だから」という言葉の中に、「技術者だから自分の専門分野、自分達の小世界の事しか考えず視野が狭い」という意味がこめられている場合があります。私は、広い視野を持つ、幅広い人になるためには、“考えを深めること”に加えて、自然や人間に対して“あたたかい好奇心”を持つことが大切だと思っています。自然や人に出会い、興味を持ち、もっと識りたい、愛したいという心を持つことが、幅広い人を育てることになるでしょう。

国土技術研究センターが幅広い視野を持った思索者集団として、一層活躍されることを切にお祈りする次第です。